

エッセイ — 【特集】「継承語教育」を問い直す

補習校に通わせるのは子どものため？ それとも、親のエゴ？

海外移住者の答えを探して

ケーシー 久美*

© 2021. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

3月14日（土）の下の娘の誕生日は、彼女が補習校に通う最後の日となった。3つ上の姉と同様、小1～中3まで頑張って補習校に通い続けてくれた。

このように書くと、まるで本人たちの意思に反して親である私が強要して娘たちを補習校に通わせたように聞こえるかもしれない。実際にはどうだったかというと、小学校低学年までは親のエゴが本人たちの意思をかなり上回っていたと思う。そうでなければ、とくに土曜日の早起きとお弁当作りは終わっていただろう。

とはいうものの、小1の最初の頃は祖父母に買ってもらった新しいランドセルを背負って補習校に通い、新しい国語の教科書で日本語を勉強することを娘たちは楽しんでいたと思う。ただ、2年生、3年生と学年があがり、国語の教科書の一単元のページ数が増え、親に怒鳴られ、泣き泣き辞書を引きながら宿題をする時間も増えるにつれ、娘たちのモチベーションは見る見るうちに下がって行ってしまった。

日本語教育の場ではモチベーションを維持するサポートをすることが如何に大切かという

* 英国在住

ことを日本語教師として主張しておきながら、我が子にはそれを実践できていなかったとは全く恥ずかしい話である。他の保護者同様、モチベーションが下がってしまった子どもを無理やり補習校に通わせ続けることに疑問を感じ、補習校を辞めさせようと思ったことは何度もあるが、結局は私自身が辞める決断を下せず、続けさせた。子どもを優先に考えたというより、自分自身が日本人コミュニティから離れることに不安を感じていたのかもしれない。

補習校に通う海外移住者の子どもたちの中には、現地の学校では成績もよく、活発だが、補習校では日本語力が他のクラスメイトに劣るため、まるで別人のように大人しく振舞っているという子どももいる。それを見かねた両親が本人の人格形成のためによくないからと辞める決断をしたケースもある。また、子ども自身が補習校にはもう行きたくないと言明をして補習校を辞めるケースも多々ある。その後、その子どもたちがどうなったかと言えば、現地校で優秀な成績を収め、今では医師の道を目指したり、研究者の道を目指したりしている子どももいる。

敢えてここで辞めて行った子どもたちの例を出したのは、補習校を続けるか、続けないかについて迷っている保護者がいるのではないかと思ったからである。補習校を辞めたからと言って、子どもの将来に負の影響があるわけでは全くない。空いた土曜日にサッカーの試合に出られるようになって自信をつける子どもたちもいれば、今まで行けなかった友だちの誕生日会に行けるようになって楽しく週末を過ごす子どもたちもいる。毎週、宿題の心配をすることも、外国人の配偶者と補習校の宿題の件で口論になることもなくなり、家族で楽しく週末を過ごせるようになったという家庭もある。

また、補習校を辞めたからといって、日本語との付き合いがそこで終わるわけでもない。大学生になって新たに日本語を学び始め、日本での就職を考える子どもたちもいれば、仕事で日本に行くことになる子どもたちもいる。ある時点で辞める決断をすることが子どものためである場合もあると思う。迷った時は、何故、補習校に通わせているのかということを冷静に考えてみたらいいのではないだろうか。子どもの人生にも親の人生にもいろいろな変化が起こるので、一度、続ける決断をしたからと言ってその決断を貫く必要もなく、その時々立ち止まって考えればよいと思う。家庭の事情、親の考え方、子どもの考え方はそれぞれ違うので、正解などない。

我が家の場合、もともと補習校に通わせることにしたのは日本語習得が主な目的であったからというよりも、異文化体験をすることによって多角的な視点で物を考えられる人間に育って

ほしいという願いがあったからである。言語はある程度、学習により身につけることができるが、日本独特の集団の文化は実際に体験しなければ、理解できないと思ったからである。国際結婚をした多くの人が経験するように、家庭内で日本語だけで会話することを徹底できないという事情があったため、バイリンガルに育てるという目標は最初から持っていなかった。

その頃はどちらかというと、外国人居住者が少ないこの地域の学校で、他の親たちと外見が明らかに異なる私が娘たちを学校へ送迎をすることによって娘たちが差別を受けずに学校生活を楽しめるかどうかを心配していた。子どもは好奇心が旺盛なので悪気はなく、相手を傷つけるような発言をしてしまうこともあるし、何らかの事情でストレスを抱えていてそのような発言をしてしまう場合もあるため、うちの娘たちがたまたまその標的になってしまってもあまり神経質にはならないようにしたが、人種差別的な言動をする生徒がいた時は早目にその芽を摘むためにすぐに学校に対処してもらった。

私の心配をよそに上の娘は毎日楽しく現地校に通い、成績もよく、学校代表にも選ばれ、イベントではいつも主役、卒業式の賞もほぼ独り占めの状態だったが、補習校では言いたい事を不自由なく表現できるだけの日本語力がなく、口数も少なかったため、先生や保護者たちからは大人しい子という印象を持たれていた。嫌々、補習校に通っていた期間も長かったので、補習校に通うことによって自信のない子に育ってしまうのではないかと危惧したこともあったが、個人の能力を尊重するこちらの教育理念に基づいてなのか、娘は現地校であまりにももてはやされていたので、補習校で言語的弱者になって試練を味わいながら小学校卒業まで頑張ることは娘のためになるのではないかと思います、そのまま続けさせた。

下の娘は上の娘とは異なり、恥ずかしがり屋で低学年の頃は人前で声を出して発表することもできなかったが、補習校の朝礼や学習発表会で発表し、先生や保護者たちに褒めてもらうことにより、段々、自信をつけ、補習校でも現地校でも積極的に発言できるようになっていった。幸か不幸か、私の非常に厳しい宿題指導に耐えかねた娘たちは高学年になってからは宿題を自分でするようになっていた。批判されるのが嫌で私には補習校の宿題を全く見せなくなっていたので、どの程度、宿題をやっていたのか、やっていなかったのかは不明だが、自主学習能力をつけさせるために辞書やパソコンでものを調べたり、情報収集したりする方法については徹底して指導していたので、何とかなっていたのではないだろうか。

中学の時に久々に娘たちが書いた作文を読んだ時にはその内容に少し驚かされた。稚拙な日本語ではあったが、しっかりとした意見が書かれていたからである。補習校の先生の指導のお

かげであることは勿論だが、物事を多面的に捉えながら、自分の意見を論理的に主張することに重点を置いた英国の学校の教育内容がかなり反映されていた。

さて、本題の補習校に通わせるのは子どものため？それとも、親のエゴ？かという問いであるが、答えは両方ではないかと思う。

今年から大学に進学した上の娘曰く、補習校に通い続けたおかげで勉強の習慣や勉強の仕方を身につけることができ、GCSE¹やAレベル²の試験の準備も無理なくでき、試験の時に必要以上にプレッシャーを感じることもなかったということである。日本語についてはというと、補習校卒業後、娘たちは祖父母とのスカイプ会話や私の友人とたまに会う時位にしか使うことはなくなってしまっていたが、日本語とは無縁の歯学部に進学した上の娘が最近、大学の語学図書館で日本語を教えるアルバイトをすることになった。また、今では携帯を肌身離さず持ち歩く典型的なティーンエイジャーになり、私とまともに口も利かなくなってしまった下の娘も、恥ずかしくて声が出せなかった小1の頃から中3で応援団長として自分のチームをリードするまでに成長した。親のエゴで始まった補習校通いではあるが、夕飯時のたわいのない会話でも活発に意見を交わし始める娘たちの姿を見ると、幼少期から現地校と補習校を往来することにより多様な考え方、価値観に触れ、常識の変動性を無意識に感じ取りつつ、生活してきたことが、物事を多角的に捉え、人の意見に流されず、自分で判断する力を育んだのではないだろうかと思う（思いたい）。将来どこで何をするにせよ、娘たちには前向きに楽しく生きてほしいと願っている。

1 GCSE: General Certificate of Secondary Education (義務教育修了試験)

2 A Level: General Certificate of Education, Advanced Level (大学入学資格)